

表現運動における指導言語の検討

吉川京子

I. 目的

近年、学校体育の現場では、楽しい体育を標榜し、児童の関心・意欲を育てることを目標に、児童が自発的に学習するための教師の支援の在り方が問われてきた。そこでは、児童の主体性と教師の指導性との調和が必要とされる。それでは、どのような教師の支援が必要とされるのであろうか。表現そのものは、それを行う主体の感性的、個性的、創造的なものであり、それ自体主観に属するものである。そのことそのものは教えることになじまず、教えることもできないが、表現の方法を教えることは可能であり、それが、学習者の個々に潜む限りない個性の開花に繋がる。その過程においては、教師の教授行為としての指導言語が、児童の動きを引き出す媒体として必要不可欠な役割を担っている。従って、学習者の発見・挑戦を助ける指導言語を選択し、選択した有効な指導言語を使いこなす能力が指導者に求められる。しかし、その困難さ故、表現運動の指導を躊躇している指導者が少なくはない。このような指導者にとっては、指導言語の選択が容易にできる尺度が必要とされる。

そこで、本研究では、表現運動指導における指導言語選択のプロセスモデルを作成し、それによって選択された指導言語を用いた場合と指導言語を用いない場合の児童の動きとイメージの違いを明らかにすることによって、その有効性を検証することを目的とする。

II. 方法

小学校3年生の音楽教材「いるかはざんぶらこ」を表現運動の題材とした。指導言語選択のプロセスは、1. 題材から連想される動き（「泳ぐ」「浮く」「もぐる」「転がる」「跳ぶ」「寝る」）を抽出する。2. 1で抽出された動きが出現すると想定されるイメージを考える。3. 2で考えられたイメージから、動きを多様化する変化要因（「動き」「空間」「時性」「力性」「身体部位」「友達との関係」）を選択し、発問を考える。4. 3の発問より出現すると想定される子どものイメージと動きから、更に動きを多様化する変化要因を選択し、イメージを考える、以上の1～4を繰り返す、イメージ及び動きが多様化に向かうように指導言語を作成した。作成した指導言語により実験授業を現職教員に実践してもらい、VTRに録画した。動きを多様化させるためのイメージを用いた指導言語を使用した授業と、指導言語をあまり与えず、児童のイメージに任せた授業における児童の動きを分析

し、比較検討した。また、授業前後に自由記述によるイメージ調査を行い、比較検討を行った。実験は、2校、各々1クラスを半分に分けて別々に行った。対象は、3年生計70名、実験期日は、平成9年11月20日～12月12日であった。

III. 結果及び考察

「イメージ」に関しては、授業前に児童が「いるかから連想したイメージ」と授業後の実際に授業中に自分や友達が「表現したいるかのイメージ」では、両校共に、授業後には、指導言語を用いた場合も、用いない場合も「動き」「行動」に関するイメージが多くなっており、これらのイメージが身体表現に繋がり易いと考えられる。

「動き」に関しては、両校共に、指導言語を用いた場合の方が、身体表現活動が見られないときがあった児童が少なかったことより、指導言語が児童の身体表現活動を促したと考えられる。指導言語を用いた場合も、用いない場合も、全児童に何らかの移動運動及び移動を伴わない全身運動が見られたが、児童各人の動きの種類は、指導言語を用いた場合の方が、両校共に多く出現したことより、指導言語が動きを多様化に向かわせたと考えられる。また、指導言語を用いた授業においては、移動運動及び移動を伴わない運動のどちらにおいても、立位、座位、臥位でのそれぞれの動きが、多くの児童に見られ、各人の動きが多様化したと考えられるが、指導言語を用いない授業においては、立位の動きのみ、または、臥位の動きのみという児童もおり、各人に動きの多様化を認めることはできなかった。更に、T校においては、臥位が多いが、立位、座位が少なく、一方、F校においては、立位が多く、座位、臥位が少なく、動きに偏りが見られた。「身体部位の動き」に関しては、両校共に、指導言語を用いた場合の方が、使用身体部位及び動きの種類共に多かった。また、指導言語を用いた場合には、両校共に、いずれかの身体部位の運動が全児童に認められたが、指導言語を用いなかった場合には、全く身体部位の運動が見られない児童が、T校においては4割、F校においては6割を占めたことより、指導言語が、身体部位の動きを誘発したと考えられる。「友達との関係」に関しては、指導言語を用いた場合は、全児童に友達との関わりが認められたが、指導言語を用いない場合には、友達と関わる事が全くない児童が、両校共に見られたことより、指導言語は、友達と関わりをもった動きの発見に寄与したと考えられる。

以上、作成された指導言語は、各人の表現運動の多様化に有効であったことより、本研究で用いた指導言語選択尺度の活用は有用と考えられた。